全国の仲間とともに合理化とたたかおう

みんなの怒りと悲しみ せめて五体そろった遺体を

とうちゃんを待ちつづけた三日間

夫の池田政雄さん（採重）を失った妻とみ子さんの話（小浜南社宅）

九日の夕方、内坑から何も知らずに帰ってきて、事故のことをはじめて知りました。なにかハッと胸さわぎがして、三川支部まで一気に走りつづけましたが、心だけせいて休みすすまずんでした。

支部で聞くと、夫が昇坑中にちょうど事故現場にいたことがわかり、眼の前がまっ暗になる気がしましたが、夜になって宮浦や四山から、生きのこったんたちが昇坑していると聞いて、もしや重傷を負ってでも上って来てくれるかもしれないと思って、支部にじっとしていました。

朝の三時、四時になっても夫の消息がわからないので、もしかして病院のうた名前がわからないまま運ばれているかもしれないと思って、あけがたに行って、ひとりひとり確めてみましたが、だめでした。

その夜は病院の土間ですごし、つぎの日は死体が安置してある体育館にも行ってみました。お棺をひとつひとつ見ても、みんな違います。

朝から下しかない遺体が一つありましたが、足をさすってみると、うちのとうちゃんよりちょっと毛が薄いので、これも違いました。

休育館のすみにビニール袋に入ったジラの肉のような、ひとかたまりの肉になった遺体だけは、私もとうちゃんかどうか見わけはつきません。

つぎつぎに運ばれてくる遺体がみな違うので、もしや、あのジラの肉みたいなのを「これが、とうちゃんよ」と手土もたちの前に持って帰らねばならないのかと思うと、悲しくて悲しくてしかたがありません。しかし最後まで頑張ろうと、休育館に残りつづけていました。

その日のうちに、また病院にひきかえして名簿をしらべ、病院の係の人に聞いてみましたが、係の人は「今日はもう打ち切りです」「休育館に確認しにきたのですか？」などといって、すこしもかまってくれません。

私もとうとう怒って「あんたたちは遺族の気持がわかっていますか」といって、けんかをしました。そばにいた執行部の人が「会社がそんなことをいっても三池労組は必ず最後の一人まで救出をつづけますから」といってくれたので、私もやっと気がおさまりました。

家に帰りたくもないし、その日も一睡も一睡もしないで病院で待ちつづけたのですが、おじさんたちの気持はわかるけど、なまじいだけがいつ家に帰ってくるかもしれん。政雄のたましいが帰っても、家がまっ暗ではかわいそうだ」といわれて、やっと家に帰る気になって三日ぶりに帰りました。

家をきれいに掃除して、お灯明を上げているところ「休育館に来て下さい」と知らせがありました。

自動車で休育館に行く途中も、またお棺のフタを開けるときも、あの肉のかたまりではないか、どうか満足に五体そろって上ってきてくれと、ほんとに祈りました。

フタをあけると、きれいな手も足もそろっていました。二日三晩水につかっていたそうです。「とうちゃんがめたかったろうね」といって、とうちゃんと握手しました。

とうちゃんの遺体は広沢さん（社会党員・前大牟田市議）の遺体といっしょに上ってきました。広沢さんといっしょですからきっとうちゃんも最後の最後まで、三池労組員として行動してくれたと思います。遺体も満足に上ってくれたので、これで子どもたちにも兄弟たちにも顔がみわたされるのでそれだけがうれしいことです。

火葬に出すとき、とうちゃんがいつもじょうだんでいっていたように、好きだったパチンコの玉をもたせてやりたくといったら、地域のパチンコ屋で玉を一個もらってきてくれたので、それをにぎらせて火葬に出しました。

私はこどもも、会社の冷たさとは考えるとて、たしかに死んだ人たちはもうなんにもいいません。その中から生き残った自分は、二度とこの悲惨をくり返さないために、命を守るために、斗う義務を負ってえらばれたのだなと思います。

人間の命はかけがえのないものだ。そしてこの事故の原因は、三池労組の人たちのほんとにあたたかい思いやりをしみじみ感じました。死んだんのことをいろいろいってもしかたがありませんが、生きのこった三池労組員を、もうこれ以上悲惨な目にあわせないように、この事故の教訓を全国の仲々の人々に知らせて下さい。

それから会社については第一も第二もありません。保安の点検だけは十二分にやって下さい。とうちゃんは会社の人が死にましたが、あまりに悲しい死にかたです。ほんとうに会社に怒りを感じます。

死んだ人は何もいわない

生き残った者は闘わねばならない

重傷を負った池畑重富さん（機械工）の話

昇坑直前に、坑内から三川支部に電話していると、突然、電話がきれ、電灯が消えました。「おかしいな？」と思いながら、みんな本線（主要坑道）まで出てくると、前の方から白い煙りがサーッと吹いてきて、それに追われるように、奥の方へ逃げてきた人たちが、目の前でバタバタ倒れはじめました。

すこし進むと二十一卸の零片（ゼロカタ）なので、そこに逃げこもうと思ったのです（四山から風がくるので）。これはいかんと思って、排気道の方へまわって、二十一卸に逃げようとしました。

隣りの同僚が倒れかかったので肩をかしてひきかえして歩きはじめたときに同僚が倒れ、私も足が動かなくなりました。いっしょに歩いていたまわりの人たちがバタバタ倒れはじめると、横の溝に倒れこむもいます。私は「もうダメだ」と思い、横のパイプに腰かけました。まわりには、ゴロゴロと人が倒れ、ガスで頭がくらくらと来ました。

「南無妙法蓮華経」をとなえる人、脱糞をする人など、この世の地獄絵でした。

私はいつも紙とエンピツを持っているので、なにか書いておこうと思ってそれをとりだして「池畑」と書こうとしたのですが、もう指の神経もきかなくなり、変な字になりました。「もう最後だ」と思って紙を後の中に入れてわからなくなりました。

気がついたのは、タンカで宮浦に上る途中でした。

どんな運命なのか、あのたくさん倒れた人々の中から私は生き返ったのです。いま、家に帰ってひとりの考えるとて、たしかに死んだ人たちはもうなんにもいいません。その中から生き残った自分は、二度とこの悲惨をくり返さないために、斗う義務を負ってえらばれたのだなと思います。

人間の命はかけがえのないものだ。そしてこの事故の原因は、三池労組の人たちのほんとにあたたかい思いやりをしみじみ感じました。死んだんのことをいろいろいってもしかたがありませんが、生きのこった三池労組員を、もうこれ以上悲惨な目にあわせないように、この事故の教訓を全国の仲々の人々に知らせて下さい。

それから会社については第一も第二もありません。保安の点検だけは十二分にやって下さい。とうちゃんは会社の人が死にましたが、あまりに悲しい死にかたです。ほんとうに会社に怒りを感じます。

第二組合員も腹の底から怒れ

宮浦支部高椋竜生さんの話

なんといっても、あまりにも残酷きわまる犠牲です。就労後間八名の殉職者も多すぎるのに……。感慨が高ぶって言葉も出ないくらいですが、人間性をまったくもたないも経営者のために人間の命があまりにも軽視されています。

わたしたちは、みんなで団結し再びこのようなことがないようにたたかいをすすめましょう。

「保安については第一組合も第二組合もないこと」という第二組合員の声が、また会社からおしつぶされようとしています。今度こそは第二組員も腹の底からの怒りを会社にぶちあてほしい。今度の犠牲者をあしがかりに、ぜったいわれわれとともにたたかってもらったい権力と王二方につながっている会社です。この厳しい犠牲も、どうこまかしてしまうかもわかりません。

「タベコの会社」の姿が大臣の口から出たように、権力と会社側に責任を労働者におしつけて、またもごまかそうとしています。みえすいた会社の腹を、今度こそは許しません。

だし、人間ひとり一人が自分で守ってゆく以外にありません。われわれは労働者です。命がないかぎり、母も弟も師も生きられません

資本家の独善のために、多くの仲間たちの命をうばわれたことになんともいえないほんとの怒りがいま、湧いてきます。

三井の冷酷さ知る

ある三化労組員の話

私たちの組員の親戚や家族にも死者がたくさんあります。自分が殺しとして、葬式にもこない三井鉱山の冷酷非道さを、いまこそ知ることができました。これは鉱山だけのことだとは、けっしていっておれないと思います。

この冷たさが大災害の原因です事故をめぐって、三池労組は終始あたたかくあっかっていただき、ほんとうに感謝しています。

三川鉱大爆発の犠牲となりし

三池労組の同志らにささぐ

石塚敦子

命かけて守りぬきたる君たちの教えはわれにあまりにも高し
なげき給うおん父上よ母上よ運けき地にも泣くあまたあり
働いて生きるわれらが働いてそのために死ぬそのために死ぬ
さかづきに血潮しぼりてわれとわが心むち打ち弔歌したむ

（東京・知火会特別会員、多摩川病院労組の石塚さんは、弔歌を血書して送ってとられました）

真実は われわれが伝えよう

港務支部　古賀昇さん　林当作さんの話

もうとうなった以上、社長をはじめ会社の首脳は、全責任をとってやめてもらう以外にはない。

出炭だけに狂奔して、差別と保安サボいくら抗議しても改善しないやつらに、今度は徹底的に責任を追及したい。

第二組合との共斗といいますが第二組合が何ひとつわれわれと共斗しようとなさる人なら、社会党員・共産党員・総評・中立労組・三池労組・三川鉱・三井鉱山・三井化学・三井造船・三井物産・三井不動産・三井銀行・三井信託・三井生命・三井倉庫・三井船舶・三井鉱業・三井金属